教育の森
— Kyoiku no mori —

東日本大震災10年

「あの日」に学び「あした」を守る

国語・上

悲しみや希望 言葉で表す

東日本大震災と防災について考える「『あの日』に学び『あした』を守る」第5回は、「国語」（上）です。震災の後、被災した人たちは俳句や作文など、言葉にならない思いを言葉で表現することで「あの日」の出来事や大切な人との別れ、自分の内面と向き合いました。それらの言葉は、震災が被災者の心に刻んだ傷の深さと、苦難の中で生きていく人の強さを教えてくれます。

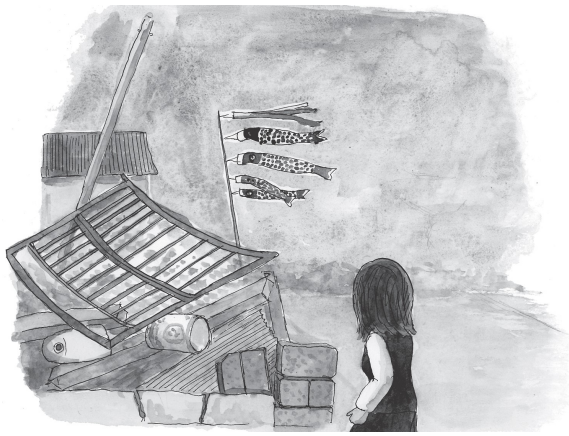
▽見上げれば　がれきの上に　こいのぼり
▽ただいまと　聞きたい声が　聞こえない
▽夢だけは　壊せなかった　大震災
▽工事中　沈む私の　心援歌
▽うらんでも　うらみきれない　青い海

五七五で向き合う

東日本大震災の地震と津波は被災地から多くのものを奪いました。大切な人やまちの景色など、それまであった現在。先祖代々の家や思い出の写真といった過去。その土地で暮らしていくはずだった未来。厳しい現実を前に、誰もが言葉を失いました。それでも日常は続きます。

宮城県女川町は、津波で町の建物の7割が完全に壊され、ほとんどの人が被災者になりました。灰色の景色の中で新学期を迎えた町立女川一中（現・女川中）の全校生徒は2011年5月、心に浮かんだものを自由に詠む俳句づくりに挑みました。先生も生徒もおそるおそる取り組んだ授業でしたが、生徒たちはすぐに五七五の言葉探しを始めました。

生まれた句の一つが「見上げれば　がれきの上に　こいのぼり」です。句を詠んだのは当時は中学3年生だった原泉美さん（24）。津波で家が流され、ショックや落ち着かない避難所生活で、体調を崩していた時のことでした。


イラスト・にしむらかえ

その少し前、車の窓越しに見た景色が頭に浮かびました。港の近く、父親がぎりぎり助かった観光物産施設「マリンパル女川」の上に泳ぐこいのぼり。教室には家族を亡くした同級生が何人もいて、かける言葉が見つからない日々が続いていました。自分もつらい。でも「家しかなくしていない私」が詠むならと考え、「見上げれば」に「ポジティブ（前向き）に『上を向いて生きよう』との思いを込めた」と言います。

その頃、泉美さんの体調を心配し、両親は東京の祖父母宅に引っ越しさせようか検討していました。「家族と離れたくなかったし、自分だけ逃げるような気がして嫌だった」。自らを奮い立たせる句でもあったそうです。その後、NHKラジオの国際放送で海外に発信され、励ましを込めた詩が世界中から集まりました。泉美さんは今、被災後の経験から体の健康について学び、東京都内の保育園で栄養士をしています。

その他の句も震災の年の5月から11月に詠まれたものです。句からは風景や詠んだ人の心を想像してみてください。「女川一中生の句あの日から」（小野智美編）という本に句が詠まれた一つ一つの背景が書かれています。当時の中学生たちはその後、「1000年後の命を守りたい」と募金活動をして、町内全21地区に高台への避難を呼びかける石碑を建てています。地区によって違う俳句を選び、あの時、震災と向き合った子どもたちの思いも未来に伝えようとしています。

文章や紙芝居で

作文は、自分と向き合う作業です。気持ちに合う言葉を探し出し、文章にするのは難しいですね。震災後、作文を通じて被災した自分や友達の心と向き合った生徒たちがいます。

紹介した作文は2014年当時、中学3年生だった立塚亜美さん（21）が書きました。亜美さんは女川町に住んでいた小学5年生の時に両親が津波にのまれ、祖父母がいた宮城県東松島市野蒜地区の家に移りました。行方不明の父と夢の中で会った揺れ動く心を「うれしい」「悲しい」という二つの言葉で表しています。

彼女の通った東松島市立鳴瀬未来中学校では、生徒が被災体験を作文に書いて読み上げ、他の生徒たちもその感想を作文にする授業をしました。「命」をテーマに対話が深まり、やがて「命と向きあう教室」という本になりました。亜美さんは作文を通じて少しずつ心を開き、最後の作文で「お父さんやお母さんがいなくてさみしかったのかもしれない」と打ち明けます。その文の後には「（授業を通して）自分の知らない自分を知りました」とつづりました。

本の著者で、指導した制野俊弘さん（現・和光大准教授）（55）は作文で『言葉にできない言葉』を精一杯つむいだから、みんなに伝わったし、聞く方も被災後の困難を一緒に乗り越えてきた共有体験があったから受け止められた」と振り返ります。一方で「被災した人には10年たった今も語れない言葉があり、ようやく語った言葉のかげに、まだ言葉にできない感情もあるということを知ってほしい」と強調します。

思いを伝えるのは、言葉だけではありません。宮城県七ケ浜町立向洋中学校の卒業生有志でつくる「きずなFプロジェクト」は、主に紙芝居を通して震災を知らない世代に震災を伝える活動をしています。

紙芝居のモデルは、メンバーの一員で岩手県陸前高田市で母と祖母を亡くした双子姉妹です。家族の死を受け入れられなかった双子が語り部をするまでを描き、幼い子に伝わりやすい紙芝居を選びました。つらい経験をした姉妹には、役をそのまま演じるのは負担が重く、大きな被災はしなかったメンバーがせりふを読み語ることにしました。その1人、紀野國七海さん（18）は「回数を重ねることに、もっとこう伝えようという思いが強くなる」と語ります。

活動を支援する元向洋中教諭で宮城県名取市立第二中学校教諭の瀬成田美さん（63）は「小学生向けと幼稚園児向けで台本の言葉を変えるなど、それぞれの目線で伝える工夫もしてきた。伝えたい思いが後輩にもちゃんと引き継がれている」と話しました。

言葉にならない思いと向き合うこと。それを懸命に誰かに伝えようとすること。身近な悩みから考えることで「被災者の心」が少し近くに感じられるかもしれません。

震災を題材にした紙芝居を小学生に披露する「きずなFプロジェクト」のメンバー＝宮城県松島町で2020年10月1日、両川美咲撮影

「大川伝承の会」共同代表・佐藤敏郎さん

俳句はみんなで共有できる

＝宮城県石巻市の自宅で、百武信幸撮影

さとう・としろうさん　1963年、宮城県石巻市（旧河北町）生まれ。震災で石巻市立大川小6年生だった次女を亡くした。2015年3月に教員を退職。「大川伝承の会」共同代表として地元で語り部活動をし、全国で講演をしている。

国語科教諭として、女川一中での俳句づくりの授業を担当しました。その頃はまだ自分も次女を亡くしていたから「今の状況を言葉にさせていいのか」という思いがありました。けれどみんな、すぐに指を折り始め、ぴたっと合う言葉を探し出した。生徒が詠んだ句の中で、「見たこと ない 女川町を 受けとめる」は「受け入れる」ではちょっと違うし、「ありがとう 今度は私が 頑張るね」も「頑張るよ」ではないところに気持ちが表れている。言葉ってすごいなと思いましたね。

震災後に気づいたのは、実は震災後にみつけようとした言葉は教科書にあった、ということです。「夏草や 兵どもが 夢の跡」も「国破れて山河あり」も、がれきだらけの女川の風景と同じ。当時使っていた中学3年の教科書の始まりは、中島みゆきの「永久欠番」の歌詞で「どんな立場の人であろうと いつかはこの世におさらばをする」とか「順序にルールはあるけど ルールには必ず反則もある」なんて書いてある。被災した後、特別な授業をしなきゃ、なんてあまり考える必要はないのかもしれない。

俳句は短いから、みんなで共有できるのがいい。彼らが高校生になった時に聞いてみると、俳句づくりの授業を通じて「1人じゃない」とか「こんなふうに考えてもいいのか」と思えたと言っていました。つらい経験は言葉にしてもいいし、しなくてもいい。ただ、言葉にしたい時にできる機会を作るのが学校の役割です。

ただし、これは震災が起きてからすることです。起きる前にどうするか。高知県で一緒に防災教育の講演をした慶応大の大木聖子准教授は「防災小説」というユニークな取り組みをしています。防災小説は、子どもたちに災害が起きたと想像してもらい、自分や家族がどうなるのか、細かく具体的な設定を考えて、最後は助かる物語にするというもの。防災は「みんな助かってよかった」というハッピーエンドじゃなきゃだめなんです。